



伝説のプロデューサー。 発想の原点は、 和歌山の景色にあった。

日本のポップカルチャーを牽引してきた、和歌山出身の伝説的なプロデューサー・酒井政利。その発想の原点は、子供の頃にずっと眺めていた和歌山の景色だった。そして導かれるように様々な才能と出会い、さらにその手腕は輝く。

仁坂知事(以下仁坂) ●酒井さんは、数多くのアイドルを育て上げた伝説的な音楽プロデューサーとして有名ですが、昭和10年和歌山県有田市にお生まれになり、東京の大学に進学するまで和歌山で過ごしていらっしゃいます。和歌山での思い出などをお聞かせください。

酒井政利(以下酒井) ●私にとって和歌山は故郷である以上に特別なもので、私を包み込んでくれる母胎というか、今でも帰郷すると山や川、海などの自然に抱かれるような感覚になります。実家は田舎の方にあり、両親は仕事で忙しく子供の頃はあまりかまってもらえませんでした(笑)。だからよくひとり家の横にある大きな池を眺めて遊んでいました。ある日、いつものように池を眺めていると、水面に周りの景色が逆さまに写り、それが風で揺れているんですね。その光景が不思議と脳裏に焼きつき、映像というものに興味を持つようになりました。夏休みになると、姉の暮らす湯浅の町で一日中映画を観て過ごしたことで、高校生になると、映画作りのことばかり考えるようになっていました。今から思えば、子供の頃に見たこの池の景色が映画作りを始めたという思いの原点だったように思います。

仁坂 ●和歌山の景色や暮らしが酒井さんの原点だったわけですね。ところが酒井さんは映画ではなく音楽プロデューサーと



和歌山の実家横にある大きな池の写真。水面に映り風に揺れる周りの風景を見て、大いに感性を刺激された。今もプロデューサーとしての原点として忘れられず、デスクに飾っているという。

知事対談 酒井政利 × 仁坂吉伸

音楽プロデューサー × 和歌山県知事
メディアプロデューサー

して活躍されています。

酒井 ●そうですね(笑)。大学卒業後は、映画の制作会社である松竹に入社しました。しかし当時はテレビ放映が始まりました。残念なことに映画会社がほとんど映画を撮らなくなっていたんですね。ですから会社においても映画について学ぶ機会も少なく、考え直して日本コロムビア(以下コロムビア)というレコード会社に転職しました。しかしもともと映画を撮りたかった訳ですから、入社してからも悩みました。そこで、「自分はそのプロデューサーとして映画を作るように脚本を、配役として歌手を、その映画の主題歌を作るつもりで歌を作ろう」と考えることにしました。そして「いい台本を探しに本屋に通っていた時、店主から『愛と死をみつめて』という本を紹介してもらったんですね。ガンに侵された女子大生と男子大学生との交換日記のようなものなんです。これがすごく感動的で、コレだ！これを歌にするんだ！」と閃きました。主題歌としての詩は、雑誌社と協力し読者に呼びかけ現役の女子大生に書いてもらいました。作曲も普通の流行歌じゃつまらないのでクラシック音楽の先生に依頼し、練りに練って3ヶ月かけてやってきました。そしてそれを部長に提案したのですが…。コロムビアで売れるには、コロムビア専属の作家でないとなんか

と聞かされ、また先輩からは、「愛と死をみつめて」というタイトルも変えた方がいいんじゃない？死って縁起が悪いから売れないよ」と言われ、結局発売は一時中止になりました。ところが原作である本が発売されるとこれが大ブームになり、延期されていた『愛と死をみつめて』のレコードもようやく発売できるようになりました。さらにはTBSでドラマ化されたことで評判になり、レコード大賞を頂く運びになりました。今でいうところのメディア戦略ですね。発売まで色々トラブルばかりだったんですが(笑)、その後は映画化もされ、これも大ヒットしました。ふるさと和歌山の景色から始まった思いが実を結ぶ形となりました。

花を愛で、その根を想う
仁坂 ●その後は、昭和43年に新しくできたCBS・ソニーに活躍の場を移し、南沙織さんや郷ひろみさん、そして山口百恵さんといった誰もがよく知るスーパースターを多数プロデュースされることとなります。
酒井 ●その頃はまたアイドルという言葉もなかったんです。コロムビアは、美空ひばりさんや島倉千代子さんなど大物歌手が在籍する非常に大きな会社なんです。専属作家を使えなどと、行動の制約が多かったんですね。ところが私は、今



の文化功労賞を受賞していただいています。多くのアイドルをプロデュースされてきて、それだけで和歌山の誇りと言えますが、南紀おやじバンドコンテスト(※)の審査委員長もやっていたいています。酒井●そのおやじバンドコンテストの審査委員長として年に1回、和歌山に戻りますが、その際は毎回すごく元気を取り戻せたような気がします。

仁坂●そうですね。それは嬉しいお言葉ですね。もともと和歌山には文化芸術に理解を示す企業や篤志家も多く、芸術家の活動を支えてくれる文化もあり、優れたアーティストも多数おられます。例えば、国民的な演歌歌手の坂本冬美さんや俳優の小林稔侍さん、ゴルフ13で有名な漫画家のさいとう・たかをさんや和歌山市ふるさと観光大使にもなられたラルクアンシエルのポーカルとして活躍するHYDEさんなどです。また和歌山市出

知事対談

酒井政利 × 仁坂吉伸

音楽プロデューサー 和歌山県知事
メディアプロデューサー

酒井政利(さかいまさとし)

1935年和歌山県生まれ。1961年に日本コロムビアに入社し、1968年にCBSソニーに移籍。音楽プロデューサーとしてカルメン・マキ、郷ひろみ、矢沢永吉、キャンディーズ、山口百恵など、300人あまりのアイドルや音楽グループを送り出した。

身で東京藝術大学学長の澤和樹さんは、地元和歌山の友人たちの協力もあり、ヴァイオリニストとして今まで世界的な賞を数々受賞されています。また後進の指導にも熱心に当たられ、さらには本県の県立図書館音楽監督としてもご協力をいただいています。和歌山は、そういう芸術文化が育める地域でもあるんですね。

酒井●今の私の夢は、オール和歌山のキャストで固め、紀の川とか有田川とか和歌山の自然をテーマにした舞台をプロデュースしたいと思っています。新型コロナウイルスの影響ですぐには実現できないかもしれませんが、主役はやっぱり坂本冬美さん。そして、舞台音楽は澤先生にお任せしたいと思っています。まだまだ夢の段階ですが。

仁坂●それは面白そうな話ですね。今年はコロナ騒ぎでどうなるかわからないんですが、和歌山では去年の秋に澤和樹さんが総監督を務められた「きのくに音楽

祭」というイベントが開催されました。一般的に文化イベントといえば、県や市といった公共がスポンサーとなって開催することが多いのですが、このきのくに音楽祭は民間の力だけで開催されており、凄くいい話だと思っています。自由な発想が出てくるのが一番なので、私はこれからも一緒に楽しみ、優れた芸術は思いつき評価させていただくしかけを作っていきたいと思っています。それが一番良いというか、最低限の義務かなっていう風に思っています。

酒井●評価してもらえたらそれを糧に人は成長していきますからね。評価というのは本当に大事なことです。

仁坂●2015年には国民体育大会が、2019年にはねりんピックが和歌山で開催され、それらに続き来年は紀の国わかやま文化祭2021(第36回国民文化祭・わかやま2021、第21回全国障害者芸術・文化祭わかやま大会)が開催されます。私自身、国体やねりんピックの開会式や閉会式を企画してきました。今回の文化祭でも企画からプロデュースしたいと思っています。こういった芸術とか文化的なイベントが続くことで、和歌山出身のアーティストの底上げに繋がっていくんじゃないかと思っています。また酒井さんにもプロデューサーとして色々お知恵を拝借することもあるかと思っています。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

※平均年齢40歳以上のおやじバンドによる音楽コンテストで、2007年から2019年まで和歌山県上富田町で開催されました。



①県庁正面に掲げられた紀の国わかやま文化祭2021の看板。②2015年に開催された国民体育大会の総合開会式。③2019年に開催されたねりんピックの総合開会式。

の全く新しいアイドル路線を成功させることができました。

仁坂●凄いですね。音楽音痴の私でも知っているような方ばかりです。改めて私が知っている曲は全て、酒井さんがプロデュースされたんだなと実感しました。

酒井●プロデュースしてきたアイドルの中でも特に山口百恵さんは、明るさの反面、どことなく暗さも持っていて、何か人を惹きつけるものを感じました。ある日、あるお坊さんから人を見る時には「花を愛で、その根を想う」という言葉を教えられました。すごく深い言葉ですよ。お寺の池なんか蓮の花が咲いています。花が凛と咲いていても、その根は泥だらけで虫も凄くいる。しかし花はそれを養分にして咲くということなんです。ね。あ、これがアイドルってことなんだ。影があるからこそ、笑顔が輝くんだ」と気づかされました。まさしく山口百恵さん

はそういう光と影を持ったキャッチーさがあったんですね。生意気なこと言うようですが、それからはスター性があるかどうか、わかるようになった気がするんですね。すごい勘違いする時もあります(笑)。でもどこかに何か、影をもってなってる子は強いですよ。物語が創りやすいです。だからプロデュースしやすいんですね。今まで私はずっと人を見て仕事をしてきました。人を探す時には必ず「こんな子に出会いたい」という想念が湧いてきます。人間というのは捜し物をするときに、あてもなく探しても見つかりません。想念というものを持っていると、それに近い人が登場する、それが運命の出会いだと思います。

文化芸術に理解があり、優れたアーティストを輩出

仁坂●酒井さんには平成30年に和歌山県

